

2020年度

慶應義塾大学入学試験問題

法 学 部

論 述 力

法学部の論述力試験について

この試験では、広い意味での社会科学・人文科学の領域から読解資料が与えられ、問いに対して論述形式の解答が求められる。試験時間は90分、字数は1,000字以内とする。その目的は受験生の理解、構成、発想、表現などの能力を評価することにある。ここでは、読解資料をどの程度理解しているか（理解力）、理解に基づく自己の所見をどのように論理的に構成するか（構成力）、論述の中にどのように個性的・独創的発想が盛り込まれているか（発想力）、表現がどの程度正確かつ豊かであるか（表現力）が評価の対象となる。

注 意

1. 指示があるまで開かないこと。
2. 受験番号と氏名は、解答用紙のそれぞれ指定された箇所に必ず記入すること。
3. 解答に際し、解答用紙の「注意」を必ず読むこと。
4. 下書きの必要があれば、メモ用紙を利用すること。解答用紙の余白には何も書いてはいけない。
5. この冊子は、問題用紙・メモ用紙を含めて7頁ある。試験開始後直ちに落丁、乱丁等の有無を確認し、異常がある場合には遅滞なく監督者に申し出ること。3頁から6頁はメモ用紙である。

「問題」

次の文章は、アジアとその近代化について記されたものである。著者の議論を四〇〇字程度に要約した上で、あなたの考えを具体的に論じなさい。

アジアとは、一体何でありましょう。この問いに答えることは、決して容易ではありません。アジアが意味するところのものは何かを考えようといいたしますと、すぐにも気づきますことは、アジアというものに対する、すべてを含んだ定義は、実は存在しないことでもあります。もちろん、特定の狙いをもった、それなりの定義は数多くございます。おそらく、もつともよく行われるのは、地理的あるいは文化的定義でありましょう。しかし、そのいずれもが、ここでの議論の目的には適しません。近代化ということ論じようとすると、そこでのアジアとは、極めて曖昧な、つかみにくい概念になってしまいます。なぜなら、この場合のアジアとは、もはや地理的もしくは空間的な概念ではなく、一定の歴史的認識をいかに言い表すか、という問題になってくるからであります。

(中略)

私が指摘したいことは、近代化に伴うダイナミックな歴史の過程を本当に理解し、そして、アジアの人々をして、あえて未踏の社会変革へと駆り立てた、その危機意識を、本当に理解しようとするならば、アジア人が、いかに自身自身と自分の置かれた状況とを認識し、定義したかを、正確に把握しなくてはならないということなのであります。踏み込んでいえば、内側からと、外側からアジア観が、単に並び立っていたのではなく、内と外のアジア観は、微妙にもつれ合い、その結果、アジア人自身のアジア観は、ふたつの見方の重なった、一種の複眼的展望ともいべきもののなかで、形づくられていったのではないかと、思われるのであります。

(中略)

近代以降におけるアジアと西欧との接触は、それまでの他の諸文明との出逢いとは、ある意味で、決定的ともいえる違いをもっておりました。近代西欧の包括的な世界観の背後には、それまで夢想だにされなかつた独自の技術体系と、それを運営するための社会組織ならびにイデオロギーがあったということですから、いい換えれば、圧倒的な力をもつて立ち現われてきた西欧の世界観、とりわけ、そのまばゆいばかりの科学技術体系が、アジア人の眼には、「普遍性」をもつものとして映ったということでもあります。

近代アジアの西欧との接触が、単なる異質な文化との出逢いとしてだけでなく、普遍性をもち、その上、優越している者との出逢いとして意識されたこと

の意味は、非常に大きかったといえます。というのは、そのときから、アジアによるアジアの位置づけは、普遍的と思われた、外からの基準によって与えられることになったからであります。これまでの伝統的で、しかも内側の基準に基づく自己の位置づけは、弊履のごとく捨てられたのであります。そして、捨てられたものに取って替った新しい世界観は、一元的文明の進歩という考え方や、さまざまな発展段階階説にみられるように、陰に陽に、西欧中心主義的なものであります。

ひとたび西欧が、普遍性をもつ優越者として、アジア人の眼に映じたとき、西欧は、もはや単なる外部の者ではなく、客観的のものに測ることのできる観察者へと変質いたしました。そして、そうした西欧の基準からすれば、当時のアジアが「文明進歩に遅れたアジア」、「眠れるアジア」あるいは「アジア的停滞」と形容されるようなものとして捉えられたとしても、不思議ではありません。近代西欧の眼からみた、そうしたアジア観は、その後、アジア人自身のアジア観に大きな影響を及ぼしてゆくことになりました。

実際、こうした西欧の眼は、アジア人自身の見方のなかに、次第に取り込まれてゆきました。それは、あたかも、自分の姿を客観的にみるには鏡さえ使えばよく、しかも、その鏡にゆがみがないと信じていたようなものであります。もとより、自分の姿について、他人の見方や意見に耳をかすということと、それを客観的な真理として受け容れるということとは、本来、全く別の事柄であります。

しかし、こうした西欧の見方を受け容れざるを得なかつたという、まさにこの点に、アジア人の歴史的な危機意識は、かかわっていたのであります。そして、そこから、内側からと外側からの眼をつなぎ合わせた複眼的な見方が生まれ、同時に、自らを変革し、近代化を押し進める具体的な取り組みを促す原動力も生まれてまいりました。いふなれば、この危機感が、人々をあえて自己変革を伴う近代化の途へ駆り立てていったわけであります。

(中略)

産業革命を経た西欧列強の圧倒的な力に直面し、彼らの技術体系に普遍性があるとアジアの人々が認めたとき、それを取り入れることは、否応ないものとみなされました。それだけでなく、そうした技術体系を産み出し、支えている社会制度やイデオロギーそのものをも導入しようといはしました。アジアは、自らの在り方を「遅れ」とみなし、改めるべきものと考えたわけでもあります。

アジアが西欧に普遍性を認め、それを受け容れようとしたことは、(中略)工業化という物質面の変革と並んで、精神面の変革をも余儀なくされたということでもあります。それは、アジアがそれまで培ってきた伝統的な宇宙観や人間観に替わる、新たな精神の抛りどころを求めてゆかざるを得なくなつたという

メモ用紙

メモ用紙

メモ用紙

メモ用紙

ことでもありました。ところが、新たな均衡がみつからぬうちに、古い調和が急激にくつがえされ、自己の全面的崩壊につながるものが、少なくはありませんでした。否定されるべき伝統が、根強ければ強いほど、この崩壊は苦痛と不安さらには悔恨をも伴うものとさえなつたのであります。

この工業化と新しい自己の模索という嵐のなかで、しばらくの安息を得るため設けられたものが、物質の世界と精神の世界との分離という折衷的な考え方でありました。近代化が工業化ではあつても、かならずしも西歐化ではないとするならば、頭のなかで物の世界を心の世界から切り離すことによつて、打ち寄せる西歐化の波を、崩れんとする自己の水際で押しとどめる可能性も残されていたといえます。いい換えれば、互いに無関係に存在する「ふたつの世界」に同時に生き得ると信ずることで、人々は、一時の安堵を見いだそうとしたといえるでしょう。

しかし、この折衷的な姿勢は、大衆はいざ知らず、欧米の人々と直接接せざるを得ない知的エリートにとつては、厳しい精神的緊張を強いることになりました。なぜならば、彼らは「ふたつの世界に同時に住む」という考え方によつては、真の自己の回復は不可能なことを悟りつつも、なお、開化啓蒙という職務を忠実に果たさねばならない立場に置かれていたからであります。

近代化の物質的側面である工業化を進めるには、一層の開化啓蒙が必要でありました。ところが、そうした啓蒙教育は、一方で、工業化の推進を援けると同時に、他方で、知らず知らずの間に、物の世界と心の世界の微妙なバランスを内側から崩してまいりました。これは、避けがたいことであつたでしょう。この精神の世界にうがたれた亀裂が拡がるにつれて、安逸な物質主義や、それへの反動としての熱狂的な精神主義が噴き出してきました。自己を統一的に制御する働きが不在であるため、むき出しのエゴ、すなわち、自己本位が前面にあふれ出て、一応の統合を保っていた伝統的社会的な仕組みを急速に崩してゆきました。無論、積極的に評価される面が、なかつたわけではありません。工業化の進展に伴つて、確かに国富は増大し、国民生活も向上いたしました。それと並んで、民主的諸制度も設けられ、それなりに機能しはじめたことも確かであります。

しかしながら、野放図な自己本位を統御する新しいアイデンティティーを、つまり、自分が何であるかということ、明確に位置づけることができず、社会はいつしか、潜在的な狂気に冒され易い体質へと変化してゆかざるを得ませんでした。例えていえば、人格の成長にとつて、ある種の不安定を伴う自我の発達が必要であるように、近代化という社会変革は、このような不安定化という代価を支払わねばならなかつたのであります。

個人の場合の利己主義や自己中心主義が、他人の存在や尊厳を無視したり

軽視したりする反社会的行動につながるのと同様に、社会的な自己中心主義や人種的な民族中心主義は、傍若無人さや、悪い意味での唯我独尊に陥り勝ちであります。それはしばしば、侵略的拡張主義、閉鎖的排外主義、狂信的国粹主義、あるいは極端な民族差別主義などの形をとつて現われます。

アイデンティティーが崩されてしまい、それに替わる新たな自己を描き出せない状態にありますと、このような社会は大きな危険に身をさらすこととなります。なぜなら、そこには露骨なエゴが我もの顔に歩き回る余地がでてくるからであります。戦争や、さまざまな政治的暴力、自然破壊、けばけばしい贅沢と隣り合わせの悲惨な貧困、人倫の頹廢、美的感覚の麻痺、こうしたものは、すべからず自己本位が際限もなく肥大し、それを統御するものを欠いた社会の病弊と申せましょう。

(中略)

さらに重要な点として、アジア自体の内部で、芽ばえてきた近代化というものに対する新たな認識を、私は指摘したいと存じます。アジアの多くの国は、普遍的と思われた西歐の技術体系を自らの国のなかに植えつけようとして、工業化のつらい試練に耐えてまいりました。ところが、工業化の途は、決して画一的なものではありません。各国各文化のあり方に従つて、独自の途があるということが、だんだんわかつてきたのであります。

工業化による開発・発展というものが、とりもなおさず民族の自我そのものの発展にほかならないのであります。帰するところ、近代化とは、それぞれの地域、それぞれの国、そして、それぞれの文化のなかで、いわば、独自の「顔」をもつた固有名詞で語られるべき社会変革と自己変革の努力であつたということでありませう。

そうであるとすれば、近代化は、いわゆる「普遍性」といった単一の物差しで測られるべきものではありません。なぜなら、近代化は、各国・各文化のなかで、それを担う人々の自己実現の過程そのものであるからであります。このような独自性と多様性に思いをいたすならば、私どもは、必然的に自分たちとは異つた他の人々の存在を認め、その尊厳を重んじ、共存を図つてゆくことが、いかに大切であるかを知るはずであります。今日、アジアの内外における国際的な相互依存の度合いは、ますます高まっておりますが、そうしたなかでは、このような認識が一層重要なものとなりましよう。

以上は、一九八三年十一月に行われた国際シンポジウムにおける基調講演の一部である。石川忠雄『私の夢 私の軌跡』(慶應義塾大学出版会、一九九三年)。試験問題として使用するために、文章を一部省略・変更した。

